

牛と怨霊

近藤瑞木

『幻想文学』56号で「くだん、ミノタウロ
ス、牛妖伝説」なる特集がくまれたことに象
徴されるように、昨今は牛鬼やくだんなど、
牛の怪談が何かと話題に上る。近世文学に於
ける牛にまつわる怪談の、随筆類のものにつ
いては、前掲誌の「牛奇談選」(須永朝彦氏)
の中にまとめられている。そこで、ここでは
浮世草子・読本等、近世小説のそれについて
述べてみたい。

浮世草子『玉櫛笥』(元禄八)巻一に「闇
夜牛鬼」の一話がある。備前国周迎すまひの黒島左
近入道宗綱という勇士が、知人宅に招かれた
帰りの夜道、ある屋敷の桐の木の梢に、強烈
な光りを発する「犢牛とどし」が蹲るのを目撃する。
牛は宗綱に飛びかかり、宗綱が二太刀刺すと

姿を消したという話である。この話で注意さ
れるのは、牛鬼伝承の地である備前(特に旧
赤坂郡の周通郷は、近世には牛馬市の開かれ
たことでも知られる)の話であるということ
と、牛鬼の「発光する」という要素が、『異
説まぢまぢ』『勝見名跡誌』などに見える
「養火」の類としての牛鬼(雨の日に身体に
まとわりつく白い光りを「牛鬼」と呼ぶ伝
承)のイメージに通ずることである。

前期読本『怪談登志男』(寛延三)巻五
「妖怪浴温泉」には、安土城内の、妖怪が
出ると評判の長屋に於て、廁の戸を開けてみ
ると大牛が蟠っていたという怪異が描かれて
いる。大牛は勇士氏家武者之助に斬られて消
え失せ、以後この長屋に怪異はなくなった。

が、この妖怪が有馬温泉に刀傷の療治に来て
いたのを、武者之助の友人が目撃したという
後日談が付き、タイトルにも表れているよう
に、むしろこの後日談の方が本話のモチーフ
であろう。
これらはまさに牛の「妖怪談」であるが、
近世の怪異小説の特徴は、むしろこの妖怪を
「怨霊譚」の趣向として撰取していくところ
にあるように思う。

例えば、前期読本『古今奇譚蜚捨草』(享
和三)巻の四「牛怪根井八良剛勇の話」では、
木曾義昌に仕える甘利紀二郎という若侍が、
義昌の姫玉琴に艶書を送ったことがきっかけ
となり、実は敵方の刺客であることが露顕し
て、牛裂きの刑に処せられる。紀二郎は牛怪

となつて現れ玉琴につきまとうが、最後には木曾の勇士根井八郎に退治される。話に登場する備前牛窓は、神功皇后に纏わる牛怪伝説の地として知られ(『本朝神社考』下巻等)、本話においては妖怪伝承が怨霊譚の趣向として利用されている。また、中本型読本『高野たかね雄おとこ髪かみ刀やいば』(文化五)では、牛都という盲人の妻雪路が、強八という悪漢と密通、共謀して牛都を谷に突き落とし殺害する。その後、牛都は怨霊となって二人に迫るのだが、それは「大やかなる黒牛に」跨った姿である。この話は舞台が信州善光寺であるから、「牛に引かれて善光寺」の縁で牛が趣向に用いられたと見ることもできるが、実際は「牛と怨霊」というモチーフの方が先にあって、それに合わせて舞台が設定されたのではないか。例えば、次に挙げる前期読本『怪談国土産』(明和五)巻二「土中の返魂」は、別段善光寺の話ではないが、『高野雄髪刀』に先行する類話である。下野那須野の辺の石崎という村で、ある百姓の美しい娘が、村の座頭と忍び逢い契りを交わしていた。ところがこの娘に氣のある浪人が、娘の親にとりいり、娘をもらい受ける。浪人と娘は程なく相思の仲となり、邪魔な座頭を欺いて鬼怒川に入水させる。座

頭は死の間際に、娘の変心に気づき、娘を呪いながら死んでいく。後日、娘が畑で菜を摘んでいると、どこからともなく現れた大牛が娘をさらひ、鬼怒川に飛び込む。しばらくして水上に座頭が現れ、「うれしやな。我一念のおもひもこれまでなり」と高笑いして沈んだ。

これらに共通するのは、牛鬼ないしは牛怪が、人間の怨念の形象として用いられているということである。しかしながらここで、なぜ「牛」なんだろうか、という疑問がわき起こる。怪談に於いて、化け猫や蛇女など、人の執念や淫靡さが動物のメタファーによって表現されることは少なくないが、その媒体として「牛」が選ばれる必然性がよくわからない。私には怨念と牛という動物のイメージとはしっくりこないように思われるのだが、逆に言えば、近世の牛に対するイメージは、それも牛の特産地であり、牛鬼伝承の多い中国地方などでは特に今日とは異なるものであったかもしれない。

俗に「食べてすぐ寝ると牛になる」などというが、『日本霊異記』『今昔物語集』等の仏教説話には、因果応報で人が牛に生まれ変わった(ないしは生きながら牛になった)とい

った類のはなしが多く、これについて須永氏は、「古くから牛が運搬や農耕に使役されてきた事が反映されてゐるのだらう」と分析している(『牛奇談選』解題)。近世でも、『奇異雑談集』巻三「牛触合て勝負をいたし前生を語る事」や『因果物語』(寛文元)下巻「生ナガラ、牛ト成僧ノ事 付馬ノ真似スル僧ノ事」など、この類の話は少なくないが、『因果物語』で注目されるのは、「其源高ハ牛鬼ニ成テ。大キナル火ノ車ヲ引。苦ミヲ受玉フ」(下巻「亡者、引導師ニヨリ輪回スル事 付引導坊主ニ付行事」)、「左衛門四郎ト云者。死シテ、牛ニ成テ歩行ケリ。皆人、牛鬼ト云テ、是ヲ怖ル」(下巻「死後、馬ト成、人ノ事 付牛ト成、人ノ事」といったように、人が牛に化したものが「牛鬼」と表現されている点である。仏教説話に言うところの「牛鬼」と、民間伝承のそれとは一応別物として考えねばなるまいが、近世の怪異小説に於いて、「牛」と「人」とを結びつける発想の底流には、一つにはこのような仏教系の説話の存在があつたかもしれない。